

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・教授

氏 名：野尻 紀恵

研究課題名：子どもを中心とした地域ふくし拠点づくりに関する研究

—美浜町における子どもの夜の居場所支援の実践を通して—

研究の目的

本研究は、美浜町を対象地域とする。

美浜町では、若年層を中心に人口の町外転出が続いている。人口・世帯の減少傾向、少子高齢化の進行が顕著である。それに伴い、町内での子育ては地域とつながりにくくなっている。これらの状況から、子ども自身や子育て世代が地域とつながり、安心して過ごせる空間・時間をいかに創出していくかは、地域の課題の一つとなっている。

全国的には、子どもの貧困や社会的孤立などの問題状況に対して、各地で学習支援や子ども食堂が行われるようになり、年々その数は増加傾向にある。例えば「子ども食堂」では、地域の潜在的な資源が活用され、数多くの人たちが集いコミュニティを形成することができている。このような取り組みは、子どもたちに安心した食事の場を与えるだけでなく、そこに集う大人もつながり、多様な関係性が紡ぎだされているという報告もある。まさに「ふくし」を地域で展開する地域ふくし拠点となる可能性を示しており、昨年度までに全国では 3,000 カ所近くの「子ども食堂」の実践が報告されている。

しかし、美浜町においては、昨年度までに「子ども食堂」が 1 つ、「子どもの夜の居場所（子ども食堂含む）」が 1 つ立ち上がってはいるものの、実践の広がりは見られていなかった。

よって、本研究では、社会資源がつながる地域ネットワークによって、子どもを中心とした地域ふくし拠点がどのように構築されていくのかを実践研究することを目的とする。

研究成果内容

1) プロジェクト目標の達成状況・成果内容

① 美浜町奥田地区における子どもの居場所支援

(子ども食堂を含む) の継続実践

2017 年度および 2018 年度の COC 地域課題解決型研究で実践してきたものを、2018 年度までの「食でつながるコミュニティ」の先駆的実践事例に関する調査で得られた知見を活用しながら継続した。

実践の日時：毎週金曜日の夜

実践の場所：知多奥田キリスト教センター（借用）

実践の中心：野尻ゼミを中心とした学生および、地域の主任児童委員等

実践の内容：居場所における遊び・学習支援・子ども食堂

1) 学生と地域の方々との協同実践の場に、研究者が参与観察者として入り、その場で起こっている事象を「実践活動者」に着目して記録した。

2) 子どもの変容、保護者の変容を中心に据えながらも、実践者としての学生の変容、地域の支援者たちの変容などを重層的にとらえ、子どもの夜の居場所というコミュニティづくりの場で起こる事象を立体的に捉えた。

↓

「子どもの居場所支援」の生成への思い、プロセスの調査

「子どもの居場所支援」の様態の記録

「子どもの居場所支援」のエピソード記録

上記を、活動者に着目して行うことができた。

② 2019年4月美浜町上野間地区にオープンした「地域の居場所」の観察・記録

実践の日時：毎週金曜日の夜

実践の場所：上野間公民館

- 1) 研究者が参与観察者として入り、その場で起こっている事象を記録する。
- 2) 居場所に参加する人の変容などを重層的にとらえ、地域の居場所というコミュニティづくりの場で起こる事象を立体的に捉える。

↓

美浜町奥田地区における子どもの居場所支援（子ども食堂を含む）ともに推進していた住民が立ち上げた。

社会的資源が繋がり、広がっていく実感を地域住民も得ることができた。

さらに、もう1カ所、子どもの保護者のための居場所が開設された一つの居場所から、活動者の思いが別の居場所へと繋がっていくことが実践として明らかになった。

しかし、その社会資源となり得た方々へのインタビュー等による調査はできなかった。

③ 理論的分析からリーフレットを作成し、講座を開催

1) 上述について、理論的に分析することによって、「子どもを中心とした居場所」およびその創造のプロセスに含まれる重要な視点やポイントを抽出。

↓

社会教育の視点、生涯学習視点から理論的に分析することが可能ではないかという議論を行う

ことができた。さらにこれらの理論から、次に起こすべきアクションや、そのアクションの先

にある、フォーマル、インフォーマルな社会的資源の繋がりを構築するプロセスが予測される

と考えた。

2) 抽出された視点やポイントを分かりやすく整理し、美浜町における「子ども中心の居場所」創り

の手順書リーフレットを作成する。

↓

ネットワークのマップリーフレットに関しては、別団体が助成金で作成を予定したため、取りやめた。

美浜町における「子ども中心の居場所」創りの手順を議論することができず、その手順書のリーフレットを作成するまでには至らなかった。

3) 講座を開催する。

↓

2020年3月に予定していたが、新型コロナウイルス感染予防のため、開催ができなかった。

④ 研究目的達成について

地域に潜在する資源や人財を活かすネットワークが動き出した。

子どもを中心とする地域ふくし拠点への住民参加が増加した。

*拠点への参加者ではあるが、運営に興味を持ってくれた

*参加者ではあるが、運営方針について意見を出してくれるようになった

*参加者ではあるが、片付け等を積極的に手伝ってくれる人が現れた

*学生の言葉かけや子どもへの姿勢に刺激を受けると言ってくる人が多くいた

*グリーンセンターが野菜の寄付を出品者に呼びかけてくれるようになった

*居場所どうして野菜の振り分けを行うようになった

*他の居場所で情報を知り、新しい場所にやってくる親子がいた

2) 研究期間終了後の今後の展望

2017年度から3年間かけて地道な地域実践活動を実施してきたことにより、地域の社会資源のネットワークが繋がり始め、活性化してきた。よ

うやく動き始めたところで、地域のフォーマル、インフォーマルの活動者が、「何」をきっかけとして、「どのようなこと」を考え、ネットワークを広げていくのかに焦点を当て、プロセスを追っていくことが可能であると思われる。それらのプロセスを実践者とともにその実践に基づいて明らかにしていくことで、共に生きる地域に欠かせない「居場所」や「地域拠点」の生成を促す要素を示唆することが可能となるだろう。

今後はそのようなプロセスに焦点化することで、地域のネットワークづくりに寄与する研究が可能であると考えられる。